

あとがき

研究代表者 高城 玲

アチックフィルム・写真は、渋沢敬三を中心とするアチックミュージアムの同人らが主に昭和初期に撮影した映像資料である。昨年2013年はその渋沢敬三の没後50年という節目の年であった。また、本書（資料編）におさめられた映像資料は1934（昭和9）年の「薩南十島調査」時のものであり、今年2014年はそれから数えてちょうど80年目にもあたっている。今から80年も前に、前年に初めて就航したばかりの航路で、各分野の研究者を含めた共同調査を組織し、しかも当時最新鋭のカメラと16mm撮影機を用いて、島で暮らす一般の人々の日常生活とモノを記録におさめたという渋沢の記録と収集に対する強い意志は、まさに刮目に値すると言えるだろう。

渋沢自身、自らを一実業家であり研究者ではないとし、「論文を書くのではない、資料を学界に提供する」ことを重要視している。そして、「理論づける前にまず総てのものの実体を掴むということが大変大切」だとし、その生涯で多くの資料集を刊行することで、研究の礎を築くことに精力を傾けてきた。つまり、研究や理論の前提には、まず確固とした資料があるべきで、しかもそれが資料集として広く多くの人に共有されるべきだとするのが渋沢の基本的な姿勢であったと言えるだろう。そのためには、履物の足半をレントゲン撮影してまで記録にとどめ資料化する程に、あらゆる手段と労力を惜しまなかったのである。こうした渋沢の資料とその刊行に対する強い思いの一端でも、本書（資料編）が受け継ぎ共有できていることを願いたい。

また、今回の共同研究において、80年前の「薩南十島調査」で記録撮影された映像資料が、更なる新たな資料化としての展開にも結びついていることも指摘しておきたい。つまり本共同研究では、当時のアチックフィルム・写真を現地で上映し、その上映会で得られた現在の現地の人々による情報と声を新たに映像資料の整理項目に付け加えたのである。当時の写真や動画記録など全く見たこともない現地の人々は、上映会で驚きの歓声を上げながら食い入るように映像を観ていた。なかには、今は途絶えてしまった民俗芸能のかつての姿に注目する人、映像を介してかつての記憶を蘇らせた人なども見受けられた。まさに資料のもつ力、なかでも言葉を介さない映像資料が記憶を掘り起こす媒介となる潜在的な力を有していることを実感した瞬間でもあった。こうして80年程も前の古い映像資料が現代に活かされ、上映会を通じて、あらたに現地の地域社会との接点が生みだされることにもつながっていくのである。本書（資料編）が、渋沢の言う「資料を学界に提供する」ことのみならず、「地域社会にも資料を提供する」というまさに万人にとっての文化資源化に多少でも資することができていれば幸いである。

なお、国立民族学博物館からは、本書におさめられた標本資料写真を提供して頂いた。掲載許可の御礼を申し上げたい。また、本共同研究の調査と本書（資料編）の編集に際しては、国際常民文化研究機構の事務局スタッフ、関係者に大変お世話になった。特に、業務協力者の因琢哉氏と岡田翔平氏には煩雑な資料整理と編集作業を丁寧を担当してもらった。ここに記して深く感謝申し上げたい。

本書に登場する人物（アチック同人らによる十島調査参加者のみ）

江崎悌三：1899～1957 生物学、昆虫学。昭和5年九州帝大教授。昆虫分類学をはじめ、生物地理学、生物学史など多方面にわたり研究。日本昆虫学会会長、日本鱗翅（りんし）学会会長。著作に『日本昆虫図鑑』など。

大西伍一：1898～1992 農村教育家、農政学。教育者団体啓明会、農民自治会などの運動にくわわり、独自の教育・文化運動をすすめる。昭和21年東京農林専門学校（現東京農工大）図書館司書、のち府中市立図書館長。著作に『日本労農伝』など。筆名は小田就三（しゅうぞう）。

小出満二：1879～1955 農学、農業史、農業経済、農政研究。東京高等蚕糸学校校長、九州帝国大学農学部教授、鹿児島高等農林学校校長、東京高等農林学校校長、鯉淵学園初代学園長（鯉淵学園農業栄養専門学校）を歴任。

桜田勝徳：1903～1979 民族学、民俗学。アチックミュージアム同人。後に財団法人日本常民文化研究所理事長、農林水産庁水産資料館長、白梅学園短期大学教授を歴任。著作に『漁村民俗誌』など。

渋沢敬三：1896～1963 民俗学、民族学。第一銀行副頭取、日銀総裁を歴任して昭和20年幣原内閣の大蔵大臣となり、戦後財政の処理にあたる。公職追放解除後、国際電信電話社長などを務める。著作に『日本魚名集覧』など。

鈴木醇：1896～1970 地質学。昭和5年に北海道帝大教授。日本地質学会会長、日本鉱山地質学会会長を歴任。敬三の二高・帝大時代の同級生。アチックミュージアムソサエティ大正10年2月2日に参加。

高橋文太郎：1903～1948 民俗学。日本民族学会附属民族学研究所研究員。生地の東京都西東京市に敬三とともに民族学博物館をつくった。著作に『秋田マタギ資料』ほか。

竹内亮：1894～1982 生物学、植物学。大正11年九州帝国大学農学部植物学教室助手として赴任。著作に『植物利用環境測定法：フィトメーター法の概要』ほか。

谷口熊之助：1882～1941 農学、大蔵永常研究、郷土史家。昭和13年鹿児島県高等農林学校（現鹿児島大学農学部）校長に就任。著作に『「ヤマチャ」調査報告』ほか。

永井亀彦：1877～1965 郷土史家、生物学、動物学。エラブウナギの研究者。鹿児島県高等農林学校。

早川孝太郎：1889～1956 民俗学。画家。アチックミュージアム同人。農村更生協会を経て、全国農業会高等農事講習所講師をしつつ、文化財保護委員なども務めた。著作に『花祭』ほか。

三宅宗悦：1905～1944 人類学、考古学、医師。昭和8年に京都帝国大学医学部講師。金関丈夫とともに人類学談話会や発掘地の遠足など自然人類学・考古学的研究会の活動を行う。昭和19年フィリピンレイテ島にて戦死。『ドルメン』3巻7号（1934年）に十島調査の報告を書いている。

宮本馨太郎：1911～1979 民俗学。後に日本民族学会附属民族博物館研究員、立教大学予科教授、財団法人日本常民文化研究所創設理事、文化財保護委員会調査員などを歴任。名前は登場しないがフィルム撮影に深くかかわっていたと思われる。著作に『民具入門』ほか。

村上清文：生没年不詳。民俗学。アチックミュージアム同人。大日本連合青年団郷土史料陳列所に勤務。柏竈（はくそう）社会員。戦後、都立南多摩高校教諭。

参考文献

神奈川大学日本常民文化研究所・国際常民文化研究機構

『アチック写真』vol. 2（神奈川大学日本常民文化研究所・国際常民文化研究機構 2010年）

神奈川大学日本常民文化研究所・国際常民文化研究機構

『アチック写真』vol. 4（神奈川大学日本常民文化研究所・国際常民文化研究機構 2011年）

岡書院

「奄美十島学術探訪団」『ドルメン』3巻7号（岡書院 1934年）

桜田勝徳

「サバニイの艘」『隠岐島前に於ける 糸満漁夫の聞書』（アチックミュージアム 1935年）

桜田勝徳

『桜田勝徳著作集』7（名著出版 1980年）

渋沢敬三

『犬歩当棒録』（角川書店 1961年）

鈴木醇

「吐噶喇火山群島を廻りて」『火山』2巻4号（日本火山学会 1936年）

高橋文太郎

「奄美十島及大島に於る民具」『旅と伝説』昭和9年8月号（三元社 1934年）

中山正則

『柏葉拾遺』（柏窓会 1956年）

日本民族学協会

『日本社会民俗辞典』第1巻（誠文堂新光社 1952年）

日本民族学協会

『日本社会民俗辞典』第2巻（誠文堂新光社 1954年）

早川孝太郎

「踊りの着物」『旅と伝説』昭和9年8月号（三元社 1934年）

早川孝太郎

『早川孝太郎全集』第9巻（未来社 1976年）

早川孝太郎

『早川孝太郎全集』第12巻（未来社 2003年）